



# Dale Pastoral Center

## DPC ニュースレター

2023年12月1日 第11号

今号は今年5月に急逝されたDPC所員堀肇先生をおぼえ、先生の追悼号といたしました。所員をはじめ堀先生と親交を持たれた3名の方々に文章を寄せていただきました。共に堀肇先生を偲び、主の平安をいただくことができますなら幸いです。

(堀先生のご紹介は2頁に掲載いたしました。)

## 一緒に歩いていた

DPC 所長 齋藤 衛

堀先生と、DPC 所員会や研究会の時、いつも帰りをご一緒させていただきました。大学からバス停まで、そして駅で別れるまで先生と一緒に歩きます。その間ずっとゆったりと話されて、私の話も聞いてくださるのです。

ある時、一緒に歩き出して先生が言われたのは「私はこうやって一緒に歩くのが好きなんです」ということでした。「途中で別れるのは寂しいですね」と。ずいぶん寂しがり屋さんなのだとはじめは正直思いました。けれど回を重ねるうちその考えを改めたのです。一緒に歩くということがどれほど温かいか。どれほど大切かを私は学んだ思いです。

共にあることの恵みを大事になさった堀先生ですが、コロナの間には、逆に不在のミニストーリーをDPC ニュースレターにも書いてくださいました。「集会や交わりが難しくなり、……大きな制約を受けています。しかしこの状況のすべてがマイナスではありません。一時的に共



「やすらぎ」(太平洋放送協会出版)より 堀肇先生画

にいないことによってお互いの関係を静かに振り返ることになり、祈りが深められ、対人感情も温かくされていくのを感じることがあります。」「時として『不在』の中には、このような恵みの世界が存在することを心に留めておきたいと思うのです。」

これは堀先生が今の私たちに言われていることだと思いました。今、堀先生は目に見える形ではおられません、霊にあってこの「不在」の中の恵みの世界を受け取ってくださいとおっしゃっているようで、感謝しています。

一緒に歩いたバス停までの時間が愛おしく思われます。ある時には「これからの教会には霊性が必要です。すでに私たちが持っているキリスト教霊性は宝です。」と力を込めて話されました。私にとって、またDPCにとって大きな宿題をいただいた思いであります。

堀肇先生、これまでいただいた恵みを感謝いたします。そして、ご家族と教会の皆さまのうえに主の慰めと希望が与えられますように。

## 【堀肇先生略歴】

1944年岐阜県岐阜市に生まれる。

大学生の時、受洗。その後神学校で学び、日本伝道福音教団正教師となる。

1985年鶴瀬恵みキリスト教会（埼玉県富士見市）に赴任。

牧会の傍ら、聖学院大学総合研究所特別研究員、キリスト教カウンセリングセンター（CCC）講師、お茶の水聖書学院講師、臨床パストラル・スーパーバイザー（PCCAJ 認定）、太平洋放送協会（PBA）会長、NHK 学園聖書講座講師など歴任。

ルーテル学院大学においては非常勤講師として、また人間成長とカウンセリング研究所（PGC）講師として長くお働きいただき、2012年 PGC 閉所後デール・パストラル・センター（DPC）設立に尽力。所員として特に牧会研究会およびスピリチュアリティ研究会で大きなご貢献をいただいた。牧会研究会での最終講義は2023年4月14日、所員会出席(オンライン)は4月24日であった。

2023年5月28日、突然の肺炎悪化のため召天。



## 堀肇先生を偲んで

ルーテル学院大学名誉教授

白井 幸子

### 別れの悲しさ

日本伝道福音教団鶴瀬恵みキリスト教会の牧師であり、ルーテル学院大学の講師であった堀肇先生が、2023年5月28日に、天国へ召されました。そのショックと悲しみは表現しようもありません。亡くなる3日前にお電話を頂いたばかりでした。そのお電話で先生は、「僕に何が起きているのか知りたい。今までこんなことは経験したことがなかったので……」と症状をお話しくささいました。

驚いた私は、帰宅した主人に電話を替わってもらいました。「……CT検査をしてもらえる病院にできるだけ早く行く方がよいと思います。病院が見つからないようでしたら、救急車を呼んで行くという方法もあります……」と主人は強くおすすめていたしましたが、奥様からのお電話で、病院嫌いの先生が実際に病院に行かれたのは、翌朝だったことを知りました。さぞ、辛い夜を過ごされたのではと想像し、心が痛みました。

3日後に再度お電話を頂きました。「朝タクシーで病院に行ったのですが、病院に到着して、そのまま入院となり、翌日の5月28日正午頃に息を引き取りました。仕事が残っているから、家に帰りたいと申ししておりました」と。

かけがえのない友、仕事の同僚、信仰の導き手を失い、胸の中にぽっかりと穴が開き、体中に空虚という風が吹き抜けていった感じがいたしました。なんという無念さ！

### 堀先生との出会い

堀先生に初めてお会いしたのは30～40年も前だったでしょうか。お人柄はいつも穏やかで、優しく、人を包みこむ雰囲気をもっておられました。



堀肇先生 ご遺族より提供



私は 1999 年よりルーテル学院大学・大学院に関わらせていただいています。大学院附属の研究機関のプログラムなどにも参加させていただきました。

当時堀先生は日本パストラルケア・カウンセリング協会の事務局長をされていましたが、先生の責任感とその事務処理能力は際立ったものがありました。公認会計士に勝るとも劣らない緻密さと正確さをもって必要な記録を記し、責任を果たしておられました。カウンセリングをするときに示す、クライアントさんを包み込む包容力、優しさ、深い指導とは正反対の極をなす水も漏らさぬ正確さで責任を果たしておられました。新型コロナウイルスの発生からの 3 年間はオンラインで必要な仕事をされました。

### 内面の異なる資質を統合して生きられた堀先生

温かさと研ぎ澄まされた理性、2つの異なる両極の資質を堀先生はどのように調和、統合されていたのか。その統合が堀先生の魅力を生み出していたと思われるのですが、長い間それがとても不思議でした。しかし、今は確信しています。答えは出版されている美しく、心なぐさめられるたくさんの著書やエッセイの中に描かれている先生の何気ないスケッチに表現されていると。

先生は述べています。「僕は絵を描き、時々展覧会などに出品することもあるのですが、本の中には、縮小したスケッチしか描けません」と。

何気なく描かれているデッサンのように見えるのですが、緻密な観察力の中に、葛藤を突き抜けて得られたさわやかさ、すがすがしさ、美しさが、生来お持ちになっている「神より与えられた」賜物によって達成されたのではないかと思います。

### 最後のエッセイ

ここにご紹介しましたショートエッセイ「慰め」は、2020 年 12 月に出版された「百万人の福音」に掲載された一部です。第 2 版は堀先生が旅立たれた後の本年 9 月に、いのちのことば社出版部が先生の愛用の机に置かれていた原稿を再編集して出版してくださったものです。堀先生がこの原稿を最後まで気にかけていらしたことを知った同社の方が感謝をこめて発刊されたのでした。

### ご家族の皆様、教会の皆様、後を託された教会の役員の皆様へ

皆様お一人、お一人の上に、主のお守りとお導きが豊かにありますよう心よりお祈り申し上げます。

心というものは放っておきますと、いつの間にか不平不満が多くなります。そうはならなくてもマイナス思考になりやすいものです。これでは明るく爽やかな明日は訪れません。この厄介な心の状態を解決するためには、目の前の小さなことに感謝することです。当たり前で忘れてしまっている「感謝」を捜してでも見つけること。これが明日を開く鍵です。

ショートエッセイ「慰め」より



## 堀肇先生と出会うことのできた幸せ

日本キリスト教団吉祥寺教会牧師 吉岡 光人

私が堀肇先生と初めてお会いしたのは 25 年ほど前だったと思います。当時私は神学校を卒業して数年の、伝道者として駆け出しの頃でした。牧会に必要な知識をもっと得たいと思っていたところ、ルーテル学院大学「人間成長とカウンセリング研究所」の存在を知り、キリスト教カウンセリングの学びを始めました。記憶が定かではありませんが、堀先生は確か「牧会事例研究会」という講座を担当されていたと思います。その講座名に惹かれて受講を申し込みました。その授業で私は初めて堀肇先生にお会いしました。堀先生の講義はヘンリ・ナウエンの著作などからの引用も豊富で、また、ご自身の書かれた文章からも引用されていました。それらは神学的でありかつ実践的で、深い洞察に富むものばかりでした。

その年私は仕事が忙しくなったこともあり、途中で学びを続けられなくなってしまいました。そのため堀先生ともしばらくはお会いする機会がなくなってしまいました。

ところがその後、牧会カウンセリングやキリスト教カウンセリング関係の講演会やシンポジウムなどで堀先生と時々お会いすることがありました。堀先生は私のことを覚えていてくださり、穏やかなお声で「お元気ですか」とよく声をかけてくださいました。

堀先生とはそのように、時々お目にかかる程度でしたが、今から 10 年近く前になりますが、ある大学の大学院の「キリスト教カウンセリング」の講義を担当しておられ、カウンセリングの学びなおしをしたいと思っていた私は、先生のクラスを受講いたしました。看護師の方や福祉関係の方々もおられ、キリスト教とは直接関係ない方々もおられました。週一回夜 6 時から



9 時までの授業は和気あいあいとしてとても楽しい授業でした。堀先生は学生の質問に一つ一つ丁寧に答えてくださいました。キリスト教的背景を持たない学生にもわかりやすく、かつ質の高い授業をしてくださいました。私自身にとっても、それまで細々と学んできたことをもう一度確認する作業ができ、恵まれた時間でした。

ある時堀先生が私にこう言ってくださいました。「吉岡先生のなさっていることは私の関心と近いと思います」と。最初はどのような意味か理解できませんでしたが、お話を聞いているうちに次第に納得でき、また私もそのように感じていることをお伝えしました。その内容というのはこういうものです。

カウンセリングにおける神学的スタンスの問題、言い換えますと、神学と、心理学・精神医学との関係についてでした。牧会カウンセリングやキリスト教カウンセリングが心理学・精神医学の理論や方法論を取り入れて成立していることは言うまでもありませんが、一部の実践者たちの中に、そうした理論や実践を無批判に受け入れてしまう傾向があります。人間を分析的にばかり見てしまい、霊性の問題も心理現象の一つと片付けてしまうのです。こうした科学に偏り過ぎた態度に対して、神学者の中には「あまりにヒューマニズム的だ」と批判する人々も少なくありません。批判された側の人々は「心理的問題やこころの病は心理学や医学の専門家に委ねるべきで、牧師が安易に踏み込むべきではない」と言うのです。こうした葛藤と批判を堀先生も感じておられ、あまりに科学に偏り過ぎる傾向には同意されていませんでした。

他方、心理学・精神医学の理論を全く無視し

「祈れば治る」と主張する牧会者や、「傾聴など無意味だ」と言わんばかりに、話し手が悲しんでいるが怒っているが聖書の言葉を使って一方的に説得しようとするばかりの牧会者もいます。堀先生もご自分のカウンセリングの方法をそういう傾向の人たちに批判されたこともあると言っておられました。

牧会カウンセリング、キリスト教カウンセリングは教会においても社会においても必要な分野だと思いますが、まだまだ理解されていない部分も多く、誤解や偏見の目で見られることをある程度覚悟しなければならないという点があります。私自身も偏った考え方の人たちに批判されることがありますが、堀先生もそうしたことをすべて覚悟の上で牧会カウンセリングを実践されてきたのだと思います。

堀先生が急逝されたことは、私も講師を務めるキリスト教カウンセリングセンター（CCC）の事務局からの連絡で知りました。数カ月前にはオンラインのDPC牧会研究会で先生とお話ししたばかりだったのに、あまりにも突然のことでしたので、私自身もしばらく実感がわきませんでした。

7月31日にお茶の水クリスチャン・センターで催された先生の記念会において、それがやはり現実であることを知りました。そしてその時、私も存じ上げなかった先生の多岐にわたるお働きを知ることになりました。そんなに多くのところでご奉仕されていたのかと改めて先生の凄さに驚かされました。

会場に堀先生の遺品が展示されていました。絵を描かれ、音楽を好まれ、紅茶を楽しまれる趣味の方であることもよくわかりましたが、最も印象的だったのは堀先生が愛用されていた聖書でした。どのページも白い部分が全く見えなほど小さい字でたくさんの書き込みがありました。私は堀先生とは牧師どうしであったにも

関わらず、聖書のお話はあまりしたことがありませんでしたが、先生の牧会カウンセリングの土台がやはり聖書のみ言葉にあったことを確信しました。み言葉と祈りの人だったのだと思います。

堀肇先生にはもっと生徒として習いたかったのですがそれはもう望めません。先生が組み込まれてきたこと、そして遺されたことを、非力ではありますが私も継承したいと強く願っています。堀肇という、素晴らしい牧会者、そして牧会カウンセラーをこの世に送られて、私たちにたくさんのよいものを与えてくださったことを改めて神に感謝したいと思います。



#### 【堀肇先生ご著書ご案内】

堀先生のご著書はこの他にも多数あります。以下のご紹介は鶴瀬恵みキリスト教会のホームページより引用のおゆるしをいただき掲載いたしました。なおご紹介文原文はいのちのことば社によるものです。感謝申し上げます。

<https://tsurusechurch.jimdofree.com/>

#### ●「心の窓を開いて～五感それは神の贈り物」

2023年、いのちのことば社堀肇牧師の最後の著作が刊行されました。月刊誌「百万人の福音」の連載を単行本化。亡くなる直前まで気にかけて、加筆した恵みのメッセージ。

#### ●「谷陰を越えて歩む」いのちのことば社

挫折、失敗、不運、無力さ…人は谷陰のような道を歩むことがある。聖書の登場人物が味わった光と闇の連鎖に、神はどう関わったのか。『弱さを抱えて歩む』【新約編】に続く旧約編。

#### ●「寄り添いの小みち」いのちのことば社

心の悩み、魂の問題について、臨床パストラルカウンセラー・スーパーヴァイザーとして多くの人に指南してきた著者が、自分の心に向き合い、毎週の祈りと黙想と思索の中から心に浮かんだ思いを書き留めた、気づきと洞察。

#### ●「こころの散歩道」いのちのことば社

●「改定新版 心の部屋を空けて」いのちのことば社フォレストブックス



## 堀先生 ～神の前に独り立つ僕しもべ～

元淀川キリスト教病院チャプレン 藤井理恵

堀先生との出会いは、25年ほど前に遡ります。まだ病院チャプレンとして経験の浅い私が、専門的働きを担うために学びの必要性を感じ、臨床パストラルカウンセラーの資格を取得した頃でした。PCCAJで資格認定委員をなさっておられた堀先生とはその総会で初めてお目にかかり、以来、年に一度のPCCAJの集まりなどの折々に牧会者として大切なことを教えて頂きました。

以前、先生の御本『こころの散歩道』の書評を担当させていただいたことがありました。そこに記されていた「苦しみや悲しみの受けとめ方」は、ずっと先生の人生を通して貫かれていたのだと、今改めて思われています。そこには、「苦しみや悲しみを、避けなければならないものとする問題解決的志向ではなく、引き受けていくときにこそ見えてくるものがある」という信仰態度が記されてありました。

そういえば先生は、たまに「実は、困ったことがありまして……」とお話されることがありました。が、なぜか、その口調はいつも穏やかでした。それはきっと、困ったことの中から見えてくるものがあることを、一つの考え方としてではなく、ご自身が心の底から確信しておられたからだと思います。

とは言え、困った問題をその身に引き受けるには、それなりの覚悟が必要です。見えてくるものをしっかり受け取るには、それを見せてくださる神様の前に、独りで立つという孤独をも背負わなければならないでしょう。

堀先生は、5年ほど前のPCCAJの総会で、バニエやナウエンを紹介しながら“孤独”についてご講演くださいました。孤独には、一人ぼっちな空しさや寂しさを伴う孤独(ロンリネス)と、独りであるという意味での孤独(ソリチュード)

があり、その意味や内容は異なっていること。ソリチュードは、神と共に独りであることであり、神と繋がり、祈りを通して深い安らぎと希望を得ることができる世界でもある、と語られました。それだけでなく、人は真に独りになると、同じようにたった独りのかけがえのない存在である他者との関係も温かいものとされていくのだ、と教えてくださいました。

多くの働きを担われてきた堀先生は、おそらく人との関係において困難を抱えることもおありだったと思います。その問題を引き受けるべく、独り神様の前に立ち、祈りを通して神様に繋がる道を歩もうとされてきた先生の、静かな決意のようなものが、語られる先生の言葉から伝わってきました。

私にとってはいつも物静かで、滅多に自己宣伝をされない先生でしたが、昨年「ライフラインに出演するので、是非観てください」とご連絡がありました。番組が始まると意外にもエプロン姿の先生が登場し、紅茶の入れ方を教えてくださいました(なんと先生は“紅茶コーディネーター”でした)。その嬉しそうな先生の姿は、まさに喜びを持って仕える servant(僕)でした。そして、この姿こそが先生の生き方そのものなのだと思います。

人を愛し、神の前に独り立ち、どこまでも希望を持って、僕として生き抜かれた堀先生。

先生とはこれからたくさん牧会についてお話をしたい、個人的にも親しくさせて頂きたいと心から願っていました。今、それはかないませんが、先生から教えていただいた牧会者としての在り方を、しっかり心に刻みたいと思います。そして私も、苦難の中にあっても独り神様に向き合い、神様が見せてくださるものを求めながら、この道を歩んでいきたいと思います。

先生を神様の御許に送られ、淋しさの中におられるご家族、ご関係の皆様には、神様の豊かな慰めとお支えとを心からお祈りいたします。

## 堀肇先生への感謝 DPC 所員より

デール・パストラル・センターでは1-2カ月に1度所員会を開いています。堀先生はいつも穏やかに、深い見識に基づいたご意見を述べられ、折々お読みになった本のご紹介などしてくださいました。DPCが発足して以来10年、常に堀先生に導いていただいた恵みに感謝をこめて。

 堀肇先生と知り合うことができたことを神様に感謝します。DPCでも、その前のPGCでも、彼と同僚として一緒に働くことができたことはとても幸いであり、刺激的でした。一緒に話し合うたびに、堀先生から多くのことを学びました。彼は様々な分野に精通していましたが、その中でも特に情熱を注いでいたのが、ヘンリ・ナウエンの著作でした。ナウエンはカトリックの司祭で、ハーバード大学の教授でもありました。先生はナウエンの著作をほとんど読んでおり、彼自身もナウエンとその著作について文章を書いていました。私はそれをとても洞察に満ちたものだと感じ、神学校の授業でもいくつかを使いました。堀先生の個人的な霊性はナウエンと類似しており、それゆえ堀先生はナウエンによって自らの信仰を励まされたのだと思います。(ジェームス・サク)

 『『寄り添う』って言葉は簡単に使えない』。あるときの所員会で堀先生は静かにそうおっしゃいました。その言葉を何気なく使っていた私はドキッとしました。先生に「寄り添う」に込めた思いを伺いたかったのですが、図らずもDPCニュースレター第7号の先生の文章から知ることができました。こう書かれています。

「人間は皆その人にしか分からない悩み方で悩んでいますから、第三者は分かりようがない」「分からなくても分からないまま傍らに居ること」「魂の『同伴』と呼んでもいい」「寄り添いの最大のモデル……イエス・キリストがその生涯を通じて示されたコンパッション（苦しみを共にする）こそが『寄り添い』の本質」。先生の言葉は心理臨床において私を立ちとどまらせてくれるものとなっています。(小嶋リベカ)



2019年2月臨床牧会セミナーでのご講義

 もう20年ほど前、堀肇先生が教会の機関誌「るうてる」に連載をされていた文章に、私が「いつも癒やされます」と感謝を申し上げた時のこと。別ページに連載を持っていた私の拙文をお読みくださっていて、「あれ、とてもいいですね。本にされたら」と励ましをいただきました。それが先生と直接お話しした最初です。以来、先生とお話しするたびに、同じ色の優しさを感じてきました。

お葬儀の時にいただいたショートエッセイ「やすらぎ」は、先生にとっての最後のご出版でしょうか。そこには、先生ご自身の描かれた絵と、いつもの優しいお言葉がありました。「大切なことは、役に立とうとは思わないで相手の傍らに居ることです。いつも変わらずに。」これが、その最後の一文。堀肇先生、ありがとうございました。変わらずに、傍らにいてくださいね。(石居基夫)

 先生が亡くなる約1ヶ月前に出されたエッセイ集の最後の頁に以下のような言葉が記されています。「悩んでいる人に対して、いくらかは役に立てるのではないか、また役に立とうという思いが膨らんできたなら気をつけたいのです。その思いが強くなると相手はもうそこにはいなくなり、〈自分〉がいるのです。実はそういう自分は相手のためにはならないのです。大切なことは、役に立とうとは思わないで相手の傍らに居ることです。いつも変わらずに。」きっと堀先生ご自身が生涯にわたって取り組まれ、そして最後に伝えたいと願っておられた言葉なのだと強く感じます。対人ケアの講義をする時によく「どのように相手に接して良いか分からない」と質問を受けます。私は何度でもこの言葉を伝え、そして何度でも自分で噛み締めたいと思います。(関野和寛)

